

2 千葉県防災教育実践例

「いのちの大切さを考える防災教育」 —地域とともに支え合う意識と体制づくり—

市原市立白金小学校長 土田 雄一

1 学校の規模及び地域環境

J R内房線の五井駅と八幡宿駅の間に位置し、学区は東西約1 km、南北に0.5 kmの長方形に展開している。全校児童382名、学級数15学級（特別支援学級2を含む）である。学区の人口は約8000人で、海岸部の京葉工業地域の発展による人口増により、一戸建てのほかマンションやアパートが多く立ち並んでいる。飲食店も多い。平成5年頃から外国人の転入者が増え、現在、外国籍児童や外国人を保護者にもつ児童は、全校児童の25%を占める。日本語の習得が十分でない児童のために、日本語指導教室を設置している。地域との関わりは深い。「学区民会議」や「学校・家庭・地域を結ぶ集会」などを通して地域との情報交換をしたり、各町会長が気軽に学校を訪問するなど、信頼関係・協力体制は整っている。各町会の祭りや敬老会等に児童が参加したり、器楽部が演奏したりするなど、地域との交流は、継続して図っている。

本校は、東日本大震災において、人的被害はなかったものの、地震による揺れや臨海部の工場タンクの爆発により、校舎等に複数の物的被害を受けた。また、震災当日

は多くの住民が学校に自主的に避難し、うち70名程度は、市の避難所に指定された体育館で翌朝まで過ごさなければならなくなるなど、地域住民にも大きな不安をもたらした。さらに海岸部から1.5 kmほどしか離れていないため、今後津波被害に対する懸念もあり、学校・地域とも防災に対する意識は高い。昨年度、災害対策コーディネーター等を招き、学校と地域が連携した防災訓練を自主的に開催している。

2 取組のポイント

- (1) 災害発生時の学校と地域住民の行動や役割の検討及び活動の実施
- (2) 学校・地域住民参加による協議会や合同防災訓練の実施
- (3) 避難所運営における具体的方策の検討及び実践
- (4) 命の大切さを考える防災授業をはじめとする、学校における防災教育の取組の公開
- (5) 市内の教職員や保護者・地域住民等の参加による講演会の実施
- (6) 防災意識を高める「白金防災トランプ」の作成と活用

【地震と津波】 24年度指定校 ①市原市立白金小学校

3 取組の概要

実施時期	計画事項	参加者
4月	町会代表者との連絡会議(4/16) 避難訓練(地震・津波)(4/18)	学校・地域 ・市防災課 学校
5月	不審者対応訓練(6/8)	学校
6月	音楽発表会：テーマ『いのち』(6/11) 市原市小中学校一斉防災訓練(引き渡し)(6/11)	学校・保護者
7月	担当者連絡会議(7/12) PTA校外パトロール(7/20)	学校・担当者 学校・PTA
8月	防災訓練連絡会議(白金町会・五所町会)(8/2) PTA校外パトロール(8/3) 防災訓練連絡会議(君塚町会・西五所町会)(8/7) PTA校外パトロール(8/21) 防災標語の作成	市防災課・学校・関係町会 学校・PTA 市防災課・学校・関係町会 学校・PTA 児童・保護者
9月	君塚・白金町会&白金小学校合同防災訓練(9/1) 市原市防災訓練(避難所開設)(9/1) 映像教材活用推進	学校・保護者・地域 防災課・地域住民・学校 学校・教職

10月	校公開授業(9/14) 担当者連絡会議(防災訓練反省会・来年度に向けて)(10/11) 音読学習発表会：テーマ『いのち』(10/19) 「白金防災トランプ」の作成	員 学校・担当者 学校・保護者 学校
11月	防災公開授業・防災講演会兼PTA研修会(11/6)	学校・教職員・保護者・地域住民
12月	避難訓練(火災・休み時間)(12/3) PTA校外パトロール(12/28)	学校 学校・PTA
1月	PTA校外パトロール(1/4)	学校・PTA
2月	担当者連絡会議	学校・担当者
3月	避難訓練(地震・津波)(3/11)	学校

4 防災訓練連絡委員会

	氏名	所属及び役職
1	土田 雄一	白金小学校 校長
2	内山 尚文	白金小学校 教頭
3	岡本 英樹	南房総教育事務所 指導主事
4	矢野 健志	市原市教育委員会 指導主事
5	芝崎 稔	市原市防災課係長
6	野村 裕一	市原市君塚連合町会ブロック長
7	飯島 洋子	市原市白金連合町会長

5 具体的な取組

(1)「命の大切さを考える防災教育」の研究指定を受けて

自分の身は自分で守る「自助」、地域で支え合う「共助」、行政と連携して行う「公助」を意識して防災教育に取り組んできた。

特に「自助」と「公助」を意識して防災教育を推進してきた。

(2)「いのち」を年間テーマにした行事

本年度は保護者も参観する集会行事（前期：音楽集会、後期：音読集会）の共通テーマを「いのち」とし、年間の取組に位置づけた。「いのち」を意識した行事や道德等での年間を通した取組が児童の心に残るものとなることを目指した。

音楽集会では、それぞれの学年が学習してきた歌や合奏などを発表した。



音読集会では、「いのちのまつり」他、「いのち」を扱った詩などの音読・群読のほか、防災標語の紹介も行った。参観した保護者からは「感動した」「いろいろな思いが浮かんできた」「涙がでた」などのコメントをいただいた。

(3)いのちを大切にできる道徳授業

心を育てるために生命尊重をねらいとした道徳授業の実践にも取り組んだ。研究授業として実施するだけでなく、授業参観・オープン参観などでも実施した。



また、初任者公開講座として3年「お母さん、なかなかい」（文溪堂）を実施したほか、9月には道徳映像教材活用推進校として、千葉県が作成したDVDを活用した授業を公開し、中でも「おばあちゃん・お母さん・わたし」（中学年）は命のつながり・受け継ぐ命の大切さを感じとらせる授業であった。

(4)緊急時の連絡体制の整備

これまでの「緊急電話連絡網」と「学校ホームページ掲示板」での連絡に加え、本年度より「家庭連絡メール」を導入した。このメールシステムは、市原市が契約しているライズ社のものであり、使用料は無料である。5月10日には、急な雷雨による下校時刻の変更など、その実際的な運用がされ、効果的であった。加入率（現在83%）を増やすこととメールを使えない保護者への連絡方法をどうするかが今後の課題である（現在は未加入家庭に電話連絡）。

(5) 市内一斉防災訓練の実施

市原市では24年6月11日に市内一斉の防災訓練を実施した（2万人参加）。本校では、地震と津波への対応訓練に加え、「保護者引き渡し訓練」を実施した。これまでも実施した経験があるため、保護者・児童とも落ち着いた対応ができた。

津波に備え校舎に避難



(6) 合同防災訓練と防災教育授業

本年度は、9月1日に地域と学校と市原市と合同で地震・津波対応の避難訓練と併せて避難所開設の訓練を実施した。地震発生後、地域の避難場所に集まり、二次避難場所の学校へ移動した。その後「津波警報」の発令により、校舎内へ町会ごとに避難する訓練を行った。さらに、保護者や地域住民は体育館に移動し、避難所開設の訓練に一次避難場所から二次避難場所（学校）へ



取り組んだ。参加者は児童・地域住民を合わせて1045人であった。

体育館に避難した地域住民



避難所運営訓練



参加したフィリピン出身の保護者は「津波がきたらとても不安だったが、校舎に避難するとわかり安心できた。」とコメントするなど、日本語の習得が十分ではない保護者・地域の方にとっても体験的に学ぶことができた。

訓練後、全校児童に対しては、NHK・Eテレ「げんばるマン」（「災害大国ニッポン」「全員が助かった」各10分）を活用し、防災教育を実施した。特に「全員助かった」の回は、被災した釜石市の子どもたちのインタビューから津波のこわさとその対策について真剣に考えることができ、「自分の身は自分で守る」意識が高まった。

(7) 「白金防災トランプ」の作成と活用

防災意識を高めるために、各家庭から「防災標語」を募集し、「地震」「風水害・火災などのその他の災害」「助け合い」「準備・心がけ」の 카테고리別に作品を分類した。よい作品を「トランプ」の中央に書き、オリジナルの「白金防災トランプ」を作成した。

「白金防災トランプ」2012



「白金防災トランプ」の遊び方

「白金防災トランプ」の遊び方 (考案：白金小学校)

- 1 声をだして読む「七ならべ」
 - ①全員にトランプを配ります。
 - ②まず、「7」を並べます
 - ③基本的に「七ならべ」と同じルールで行います。
 - ④カードを出すときに、カードに書いてある標語を読んでもらいます。
- 2 「防災トランプカルタ」

「白金防災トランプ標語一覧」(裏面)を活用し、「読み札」として、カルタができます。
- 3 声にだして行う「新・神経衰弱」
 - ①「神経衰弱」のルールで行います。
 - ②めくったカードに書かれている標語を読んでもらって、次のカードをめくります。(書かれている標語を読みます。)
 - ③一度、めくったカードはそのまま(表)にしておきます。
 - ④数字が同じカードがでたら、もらえます。
- 4 「防災アクション！」(白金小オリジナルゲーム)
 - ①トランプの数字が見えないようにして、ドーナツ状に丸く置きます。
 - ②「防災」とかけ声をかけて、好きなカードをめくって、中央に置きます。
 - ③めくったカードによって、全員が次のポーズをします。
 - スペードだったら、すばやく「両手で頭を覆います」。
 - クラブだったら、「全員が手をつなぎます」。
 - ダイヤだったら、「両手で口を押えます」。
 - ハートだったら、全員「両手を交差して胸を押えます」。
 - ④全員が成功したら、次のカードをめくります。
 - ⑤もし、ポーズが遅かったり、間違えたりした人は、カードに書いてある標語を読み上げます。(たまったカードを全部読みます。)

カルタよりも活用機会が多いトランプに標語を入れることで、目にふれる機会が増え、防災意識を高めることを目指している。基盤となる家族のつながりを大切にすること

ともねらいのひとつである。

遊び方も工夫し、「声を出して読む七ならべ」や標語を読みながら行う「新・神経衰弱」などのほか、スペードやハートなどのスート(マーク)に合わせて、「両手で頭を覆う」「両手で口を押える」「全員で手をつなぐ」などのポーズをとる「防災アクション」も開発した。遊び方は、トランプといっしょに説明書をつけてあり、学級でも実践している。子どもたちの笑顔が広がる活動になった。作成したトランプは家庭と地域に配布した。

(8) 「命の大切さを考える防災教育」公開研究会

11月6日(火)の午後に公開研究会を開催した。防災教育に関連する授業(特別活動・道徳)を公開するほか、千葉科学大学の北彰教授の防災教育講演会を実施した。

公開授業
2年3組 中田典子 学級活動 「もしものときにどうするの？」
4年1組 秋葉陽介 学級活動 「自分の身を守るために必要なこと」
6年2組 平澤毅之 道徳 「支え合う命～東日本大震災から学ぶこと～」



2年生では、図書室で地震が起きた場合を想定して「模擬図書室」を再現し、実際に本が落ちてきたときの対処のしかたを疑似体験した。その様子を撮影したビデオからよりよい対処のしかたをふりかえった。

4年生では、「全員助かった」の番組を制作したスタッフをゲストティーチャーに釜石の実際の様子を聞き、身を守るために必要なことや今後の被災地支援について考えた。実際に現場で取材した方の話は子どもたちの心に残るものとなった。

6年生では、東日本大震災後の新聞記事や写真、児童の作文等を活用して、支え合いながら自分たちの命を守ることの大切さについて考えさせた。実際に起きた話を資料にしているので、自分の命だけでなく、回りの命も大切にしようとする気持ちももてる授業となった。

教育講演会は教職員だけでなく、地域に公開し、PTAの研修として位置づけ、より多くの方に参加してもらうようにした。防災意識から減災の意識を高めること、地域とともに「自助・共助」の意識をもつこと、訓練を継続する必要があること等を再認識した講演であった。

3 成果と課題

【成果】

(1) 地域と保護者と連携した訓練の定着

23年度に続いて、学校・地域・保護者と連携した避難訓練を実施したことから、以前にもまして、訓練に対する意識が高まった。

(2) 児童の意識の高まり

避難訓練・防災意識を高める授業や「白金防災トランプ」の作成などにより、災害時の対応への意識が高まったと言えよう。

(3) 教職員の意識の高まり

研究の推進とともに、教職員も今まで以上に防災意識が高まった。避難訓練だけでなく、道徳や特別活動などの授業においても防災・減災の意識をもって取り組むことができた。

【課題】

(1) 外国人保護者への情報・伝達

本校には、現在9か国の外国人保護者がいる。緊急時に備え、一斉連絡メール、学校ホームページの掲示板、電話連絡網の3つの連絡・発信体制をとっているが、「日本語がわからない」「携帯が繋がらない」など、情報の伝達が困難な状況にある。

重要な連絡については、母国語に翻訳をした文書などで対応をしているが、緊急時の連絡では、翻訳対応がむずかしいのが現状である。

そこで、「何かあったら学校へ」を合い言葉に、地震や津波だけでなく、火災や風水害等、困ったときには学校にくることをさまざまな機会を通して話をしている。

今後は、他県・他市の取組を参考に連絡方法・伝達方法を工夫したい。

(2) 防災意識の継続

現在は、防災・減災への関心が児童も保護者も地域も比較的高い。今後はその意識を継続させるとともに、「自分の身は自分で守る」ことを重点とした防災教育の継続が必要である。「予告なしの避難訓練」などを年間計画に位置づけ、防災意識を継続したい。

(3) 防災教育教材の活用と開発

児童向けの防災教育教材は増えてきているが、活用が十分にできているとはいえないのが現状である。児童の実態に応じた教材の活用と「防災行動マニュアル」の作成等、地域に応じた教材の開発が課題である。